

地方紙におけるオリンピック報道

——ロンドン大会と中国新聞の事例——

渡 辺 勇 一*

はじめに

2012年7月27日から8月12日まで、英国ロンドンで開催された第30回夏季オリンピックは、日本にとって初参加のストックホルム大会（1912年）からちょうど100年となる節目であった。日本は金メダル7個を含む過去最多のメダル数38という成績を挙げた。

本報告では、日本の新聞ジャーナリズムにおけるオリンピック（以下「五輪」）報道の歴史を踏まえて、通信社への依存度が高くローカル色の濃い地方紙がどのように五輪報道に取り組んできたのか実態を明らかにする。中でも、広島市に本拠を置く中国新聞社（以下「中国新聞」）の五輪報道を多角的に実証したい。手法の一つとして、今回のロンドン五輪における量的・質的分析を試みた。具体的には競技別の総面積や記事量などを算定し、掲載量の多かった競技や、結果的に冷遇した競技などの特徴を示した。さらに、取材記者や編集者が最も力点を置く「読み物」記事の内容を分析し、記事中のキーワードの頻度から記事の特性を探った。

1. 戦前の五輪報道史

幕末から明治初期にかけて現代の新聞の原型が誕生する。いち早く、五輪に着目したのは大阪毎日新聞である。1908（明治41）年7月の第

4回ロンドン大会で、たまたま現地に滞在中の同社通信部長、相島勘次郎はマラソンのレースを目撃している。トップのドランド・ピエトリ（イタリア）がゴール前で脱水症状で倒れ、審判に助け起こされて失格となった。壮絶なレースを目撃した相島は「マラソン競走」と題して6回の連載記事を書き送った。掲載されたのは2か月後の9月7日からであったが、本邦新聞最初の五輪現地報告である。相島は最終回、「此の次には日本も彼の運動同盟に加はり、選手を送る様にしたいものである」と結び、日本の五輪参加を熱望する。

ロンドンから4年後、大阪毎日・相島の記事に呼応するかのように日本は国際オリンピック委員会（IOC）に加盟し、1912年のストックホルム大会に初めて代表選手2人を送った。報道要員として派遣・登録されたのは大阪毎日、読売新聞社の記者計2人である。ただし、当時の通信事情から速報性と呼ぶには程遠く、記事が掲載されたのは大会後であり、多くの新聞は外国通信社の記事を転載した。

五輪報道が本格化し、速報が白熱するのは1932年の第10回ロサンゼルス大会からである。前回（1928年）アムステルダム大会の陸上三段跳びで織田幹雄が初めて金メダルを獲得、女子陸上選手の人見絹枝が800mで銀メダルを手にするなど日本選手の活躍が始まった。ロサンゼルス大会の日本選手団は役員61人、選手192人に増加した。五輪参加は日本の外交戦略であり、

* 広島経済大学経済学部教授

国民のナショナリズムを鼓舞する格好の舞台装置であった。新聞も当然呼応し開会式では号外を発行、メダル獲得を「戦果」とする戦争用語が氾濫するのである。10回大会に日本から12社20人の記者が派遣された。現地応援の在米特派員らを合わせると60人に達したという。

海外からの通信事情が改善し、1936（昭和11）年第11回ベルリン大会では日本放送協会がラジオ実況放送を開始した。大会組織委員会が日本の報道陣に用意したチケット（報道用）は16枚であったが、ベルリンの日本人記者はその数を大きく上回ったとされる。満州事変以後の軍事体制の中で日本の五輪報道は国威発揚の重要な媒体としての役割を帯び、過熱の一途をたどった。

2. 地方紙の五輪取材

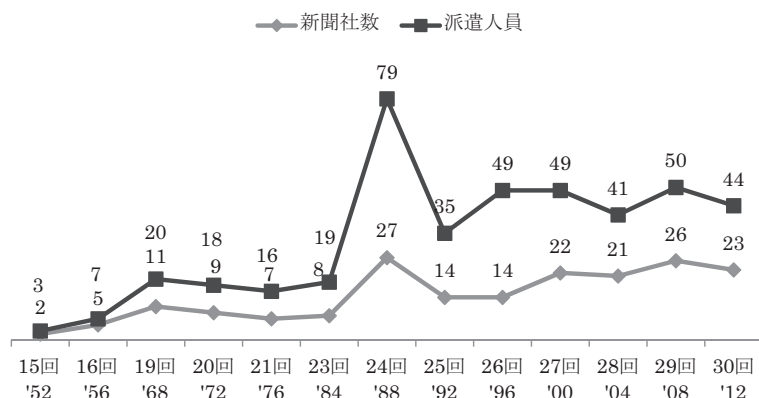
朝日、毎日に代表される全国紙の五輪報道合戦は、地方に拠点を置く地方紙（新聞）にも無縁ではなかった。従来は通信社配信の競技速報を掲載し、地元選手が活躍すれば家族の喜びを載せる程度であった。1936年に国策通信社の同盟通信が誕生し情報量が飛躍的に向上すると、地方紙の五輪報道も拡充した。一方で、有力な

新聞社は独自に五輪特派員を派遣し始めた。ロサンゼルス大会では新愛知、三都合同（神戸）、神戸又新日報の3社が記者を送り込んだ。

戦後、日本が再び五輪に参加した1952（昭和27）年の第15回ヘルシンキ大会で現地取材したのは8社計23人であった。うち地方紙は2社（中日、東京）の3人である。以後、日本報道陣の人員増に比例して地方紙記者の派遣も増えた。

図は日本体育協会・日本オリンピック委員会発行の各オリンピック競技大会報告書のプレス・メディアの項から、地方紙に関わるものを抜き出して作成した。いずれも五輪の各組織委員会が発給した取材用ADカード枚数に基づくものである。24回ソウル大会（1988年）の27社、79人の派遣数が突出している。隣国開催であり、カード発給枚数が多かったことにもよるが、地方紙の五輪派遣に弾みをつけた。以後、五輪取材は35人から50人の間で推移する。

元来、地方紙は主として通信社（共同・時事）の配信記事を掲載してきた。海外の五輪に取材要員を派遣することは予算的な制約や送稿手段などがネックとなり、躊躇するケースが多かった。ところが、ソウル大会が一つの転換点となった。距離的に近い韓国での大会とあって、



注) 15回ヘルシンキ、16回メルボルン、19回メキシコ、20回ミュンヘン、21回モントリオール、23回ロサンゼルス、24回ソウル、25回バルセロナ、26回アトランタ、27回シドニー、28回アテネ、29回北京、30回ロンドンの各大会別。17回ローマは資料がなく、18回東京は日本開催、22回モスクワは日本不参加のため除外した。下段は地方紙の派遣新聞社数、上段は地方紙合計人数。

図 地方紙の五輪取材派遣人数

これまで見送っていた多くの地方紙が派遣に踏み切った。ソウル五輪取材の地方新聞社で、過半数の14社は初の記者派遣であった。

とはいえ、中日・東京、北海道、西日本、中国、河北新報のブロック紙などを除けば、各紙はほとんど単独での五輪取材である。人的・物理的にも新聞社の発行地である地元出身選手に焦点を絞った報道にならざるを得ない。

3. 地方紙五輪紙面の特徴

前述したように、近年の地方紙五輪報道の傾向として、地元ゆかりの選手に特化した一点報道が顕著となった。派遣記者は、特定の選手の奮闘ぶりを地元読者向けに伝えるのである。例え予選敗退に終わろうとも、丹念にフォローする。地元を意識した、全国紙との差別化がそこに見受けられる。

例えば、2012年7月31日付愛媛新聞は1面に「中矢 誇りの『銀』」の大見出しを掲げ、「県人28年ぶりメダル」と添えた。柔道男子73キロ級で銀メダルの中矢力選手（愛媛県出身）を称賛し、スポーツ面では同社初となった派遣記者が健筆をふるう。小・中学生からの写真を並べ2つの面を埋めた。社会面には幼いころ通った柔道場の後輩たちの談話が弾む。こうした紙面展開は、地方紙にある程度共通した構図である。「地元選手の偉業を称え、県民に勇気を与える」とコラムに記した新聞社もあった。

地元選手偏重の報道スタイルは、「県紙」と呼ばれる地方紙にとりわけ顕著である。郷土意識を高揚させ、連帯感を醸成させる「お祭り騒ぎ」の手法は高校野球の甲子園報道などにも相通じるものがある。

五輪組織委からの取材カードがないまま非公式に現地入りするケースもある。選手の直接取材は不可能だが、地元応援団に同行して会場に陣取り、家族、同僚らの応援ぶりを地元へ届けるのである。青森県八戸市に本社があるデー

リー東北の記者は、女子レスリング応援団の一員として訪英し、地元選手の金メダル獲得を競技場から伝えた（2012年8月10日付）。岡山の山陽新聞は、女子マラソン選手の所属する天満屋応援団に随行、沿道の声援ぶりを報じている。社会面のロンドン発の記事の下には、天満屋の広告が掲載（同8月6日付）された。こうした地元企業やスポーツ団体などとタイアップした五輪報道が生じるのも、地域密着を掲げる地方紙紙面の特徴ともいえる。

4. 中国新聞のロンドン五輪報道

広島市に本社を置き、鳥取を除く中国地方4県を配布エリアとする中国新聞は販売部数約65万部で、前述の県紙とはやや異なりブロック紙的性格を持つ。戦後の五輪報道では、1976年モントリオール大会から少数とはいえ一貫して記者を派遣している。

今回のロンドン五輪において、中国新聞がどんな競技を重点的に紙面化したのか、開会式翌日の2012年7月29日から8月14日までの17日間の朝刊紙面（最終版）から、競技別の専有面積を算出する処理方法で数量的分析を試みた。測定したのは、競技別の①総面積②記事量③写真面積である。結果は以下になった。％は全体量からの割合を示す。

3つのカテゴリーともほぼ同様の結果を得た。最も分量が多かったのは、ワールドカップ優勝で注目を浴びた女子チーム「なでしこ」を中心とし、若い男子も4位と健闘したサッカーであった。米国との決勝に進出したことで、なでしこブームが再燃した。紙面の扱いにも反映したようだ。

メーン競技とされる陸上は従来の大会であれば首位にランクされるはずであった。しかし、男子ハンマー投げの室伏広治の銅が日本勢唯一のメダルであり、期待の男女マラソンなどが不振だったことなどが影響した。半面、女子アス

表 掲載競技別の量的調査

①総面積

競技	サッカー	陸上	柔道	レスリング	競泳	その他
%	16.6	15.3	12.2	9.7	9.4	36.8

②記事量

競技	サッカー	陸上	柔道	競泳	レスリング	その他
%	17.0	16.2	10.3	10.2	8.3	38.0

③写真面積

競技	サッカー	柔道	陸上	レスリング	競泳	その他
%	17.0	16.2	12.8	11.0	8.0	35.0

注) 特定の競技名が判明する内容を抽出した。総面積は見出し、各種記事、写真類を含む。記事量は本記・戦評・読み物・雑感を収録。写真のうち顔写真は除いた。

リートが好成績を残した柔道、レスリングが上位に位置し、エース北島康介が平泳ぎ3連覇を逃した競泳が5番目となった。総じて、人気競技やメダル獲得競技が優先される傾向といえる。

サッカーや陸上、柔道などが連日派手に紙面を飾る中で、ほとんど登場しない競技も存在した。期間中、ハンドボールと水球の2競技が、記事として紹介されることは一度もなかった。連日、記録だけの紙面化であり、競技の内容は記録でしか知り得なかった。中国新聞の地元広島は男子・湧永製薬、女子・メイプルレッズと日本リーグ上位の2チームを有しながら、ロンドン五輪に関してのハンドボールの扱いにはやや疑問が残った。日本代表が出場しない球技の報道量は全般的に少なく、男子バスケットボールは大会最終日ようやく米国優勝を伝える記事・写真が掲載された。

競技写真がまったく掲載されなかったのは、調査対象とした33の競技・種目のうち、飛び込み、水球、オープンウォーター、ボート、ビーチバレー、セーリング、ハンドボール、射撃、近代五種、トライアスロンの10であった。約三分の一に相当した。

5. 「読み物」記事に見る質的分析

五輪報道の紙面を構成するうえで、本記、記録、戦評とともに重要な役割を演じるのが「読み物」と呼ぶ囲み記事である。多くは記者の署名入りで、選手や監督らの談話を交え、勝因や敗因、競技のハイライトなどを織り込む。取材記者にとっては力量が問われ、文章力や取材力が試される。ある程度、競技や選手の情報に精通し、観察力や技術面の裏付けなどが要求され「読み応えのある」記事が求められる。

17日間の中国新聞朝刊から、「読み物」の掲載状況を調査した。1面、スポーツ（五輪）面、社会面を合わせ、192本載った。出稿元の内訳は、共同通信155本（80.7%）、自社33本（17.2%）、中日グループ4本（2%）である。自社とは、ロンドンに派遣した中国新聞運動部記者（1人）であり、中日グループとは、中日新聞を核として記事を相互に交換し合う友好社（中日・東京、北海道、河北、西日本）記事を指す。

今回、中国新聞が共同通信の配信記事を多用したのは夕刊記事との兼ね合いがある。日本との時差8時間のロンドンでは、多くの競技の結果は日本の深夜から未明に判明した。正午ごろ

までに記事を締め切る夕刊では中日グループの配信を多用し、朝刊では共同と自社記事を優先させたと思われる。

掲載した読み物の競技別本数は多い順に次の通りである。

①陸上31②柔道27③サッカー26④競泳、レスリング各21⑤卓球16⑥バレーボール10⑦体操9⑧ボクシング6⑨テニス、ホッケー各5など。

陸上、柔道、競泳、レスリングなどはいずれも個人競技であり、「人物もの」として比較的読み物記事に仕立てやすい側面があり、必然的に上位に位置した。半面、競技別総面積や記事量ではトップだったサッカーは団体競技であり、「チームもの」としてまとめる傾向があり、上位を譲った格好となった。

読み物記事の質的分析の尺度としたのは「キーワード」ともいうべきフレーズに着目した。記事の主要テーマとなる着眼点を探り、分類を試みた。当然、文中には重複するキーワードがあったが、個別にカウントした。キーワードの頻度順は以下ようになった。

①家族（父、母、兄弟・姉妹ら親族）	27件
②メダル（あるいは金・銀・銅）	13件
③悔しい（悔しさ） 大舞台	各10件
⑤悲願 雪辱 惨（完）敗 北京	各8件
⑨リオ 仲間 頂点	各7件
⑫恩師（コーチ） 表彰台	各5件
⑭執念 涙	各4件

読み物記事の骨格となる表現の中で、「家族」をテーマとしたものが最多であった。言い換えれば、選手の人間性を浮き彫りにするために家族や肉親を登場させて親近感を持たせ、選手の育った背景や心理状態などを際立たせようとする手法である。銅メダルだった父親を超えた女子重量挙げ銀の三宅宏美、自宅の卓球台で両親から仕込まれ、コーチとして母親が帯同する女子卓球の石川佳純ら、親子・家族をめぐるエピソードは格好の題材となった。

「金メダル」や「銀」など、そのフレーズだけで競技の成績が分かる表現や勝負へのこだわりを示す言葉も多用された。喜びや楽しさなど明るいイメージより、「悔しい」という感情の方がより多数を占めたのは、敗者への励ましとみるべきだろうか。

古臭い、大時代的な表現が頻発するのもスポーツ記事の特徴である。「悲願」「雪辱」「偉業」「屈辱」「闘志」など日常生活では登場する機会の少ない用語が、むしろ慣用的に使用される。

6. ま と め

中国新聞紙面にみるロンドン五輪報道について、読み物記事への評価を中心とする若干の考察を加えたい。いうまでもなく新聞記事の作成は時間との闘いである。とりわけ時差8時間という厳しい時間帯での今回の記事執筆には相当苦心したであろうことは想像できる。放映権を持つテレビ局などのインタビューが優先される取材システムの現状において、新聞ジャーナリズムが苦しい立場となっているのも事実である。

こうした環境であるがゆえに、安易に記事を書き飛ばす風潮があるのは否定しきれない。先に挙げたキーワードでの「家族」が登場する頻度の高さ、紋切り型の古臭い常套句の多用が目立つのである。「メダル」の表現に固執する勝利優先主義、「がんばれニッポン的」なスポーツ版ナショナリズムによる独特の高揚感や感情の押し付けが漂ってはいまいか。

こうした観点から、読み物記事のトーンに共通するある種の同質性、あるいは「感性の均質化」とも呼ぶべきワンパターン、型にはまったステレオタイプな表現が感じ取れるのである。短時間で書き上げなければならない時間的制約があるとしても、選手や読者に迎合しがちで平板な「読み物」から、説得力があり、読み応えのあるオリジナリティにあふれた個性的な内容

にすべく努力を傾ける必要があるのではないか。

付け加えるならば、192本の読み物記事のうち、外国勢に触れたものは9本(0.5%)しか掲載されなかった。ロンドン五輪では、全競技に女子選手が参加した。特にイスラム教国のサウジアラビア、カタール、ブルネイからは初めての出場だった。スカーフに代えてキャップを着用した女子柔道選手など新しい時代の訪れを感じさせた。しかし、そうした国際的感覚の視点に立脚した読み物記事は乏しかった。全体的に日本選手や地元中国地方関連選手、チームの動向、メダル争いの興味に終始した感が強い。この傾向はとりわけ共同通信の配信記事に色濃いのである。

五輪期間中17日間の全国紙(朝日、毎日、読売、産経)と地方紙(中国、山陽、愛媛)計7紙の朝刊1面トップ記事に占める五輪関係の回数を調べた。全国紙では毎日13日、読売10日、朝日9日、産経7日に対し、山陽、愛媛がともに15日、中国は13日が五輪記事を1面トップに置いた。五輪をしのぐ重要なニュースがあったと思われる中で、(広島地方に届く)全国紙が比較的抑制の効いた紙面であったのに比べ、地方

紙の五輪への依存度の高さ、過熱化が目立った点を最後に指摘しておきたい。

おわりに

研究集会で発表の機会をいただき、感謝します。自らの記者経験を顧みて反省すべき点が多々ありました。貴重な指摘をいただいたスポーツ経営学科の諸先生をはじめ、多くの方から示唆に富む質問を投げかけられました。今後の課題と受け止めさせていただきました。

競技別記事量の調査は、2012年度スポーツ経営学科2年後期プレゼミ生12人が担当してくれたことを付記します。

参考文献

- 永代静雄編(1985)復刻版『日本新聞年鑑 11巻』日本図書センター
- 奥 武則(2000)『大衆新聞と国民国家』平凡社
- 加藤博夫(1984)「新聞報道とオリンピック」『体育の科学』第34巻8号、体育の科学社、pp. 597-602
- 津金澤聰廣・有山輝雄編(1998)『戦時期日本のメディア・イベント』世界思想社
- 日本体育協会・日本オリンピック委員会(1952～2013)『各オリンピック競技大会報告書』
- 浜田幸絵(2010)「戦前日本のオリンピック」『コミュニケーション科学』東京経済大学、第32巻、pp. 133-154
- 毎日新聞社(2002)『毎日の3世紀 上巻』